

四

人目

ITスペシャリスト (ネットワーク) の匠 止めない通信を支える

顧客と技術つなぐ「通訳者」

東日本第2事業本部サービスプロバイダー第2技術部第2チームエキスパートの池田信明氏は、約30年にわたり通信キャリアやサービスプロバイダー向けの基幹ネットワークを支えてきた。銀行系ネットワークの構築を経て、2002年から大手通信キャリアを担当。次世代ネットワーク、MPLS(複数の通信経路を効率的に制御する技術)、VPN(仮想私設網)など、止められない広域通信網の設計、構築、運用に携わってきた。06年からは次世代ネットワークの立ち上げにも貢献し、その後は幅広いサービスプロバイダーを技術面から長く支えた。

現在は、大手通信キャリア向けAI(人工知能)基盤の提案支援や、ネットワーク案件全体の技術支援を担う。生成AIの普及で、データセンター内では大量の通信が短時間

に集中し、GPU(画像処理半導体)を効率よく稼働させる高速・低遅延のネットワークが必要になった。データセンターの分散が進めば、拠点間を結ぶキャリア網にも、より大容量で遅延の少ない設計が求められる。

一方、通信網は物理機器だけでなく、仮想基盤、コンテナ、クラウド、コア網、アクセス網が混在し、運用は複雑さを増している。人材不足に対応するには自動化が欠かせないが、池田氏は「自動化は目的ではなく手段」と強調する。顧客ごとに異なる課題を見極め、効果が出る領域から着手する必要がある。



池田信明

最初の候補に挙げるのが障害対応だ。通信に直接影響する設定変

更よりも、まず情報収集や原因分析を自動化すれば、比較的低いリスクで運用者の負担を減らせる。ただ、ネットワークは1台の機器だけで完結しない。複数メ

ーカの機器が混在し、1カ所の変更が全体に影響するため、サーバーより自動化が難しい。全体の構成や状態を正確に把握することが前提になる。

AIOps(AIを活用したIT運用)による障害検知や原因分析、一部の自動修正は実用段階に入った。ただ、通信網全体を人の判断なしで動かす完全自律

化にはまだ時間がかかる。現状はAIが異常を検知し、経路変更などを提案して、人が実行を承認する段階だ。通信を止めないため、段階的に自律化を進める姿勢を崩さない。

池田氏が最も重視するのは、顧客の要望を正しく聞き取り、社内の専門家へつなぐ「通訳者」の役割だ。自ら全てを解決するのではなく、必要な技術を見極め、適切な人材と連携して堅ろうな基盤へ落とし込む。そのために新技術を学び続ける。顧客と技術の間に立ち、止めない通信を支えている。

そのため、専門外の新技術にも関心を広げる。全ての分野の専門家になる必要はない。顧客の話を理解し、社内の有識者につなぐため、幅広く技術を追いつける。新技術の情報収集も続けている。

つなぐ みる ぶく かわる



ICT基盤構築を手がけるネットワンシステムズが立ち上げた「匠」制度。高い専門性で事業に貢献するキャリアパスを示す仕組みで最初の7人を認定した。

五

人目

ITスペシャリスト (セキュリティ) の匠 IDで守り、IDを守る

我慢させない安全設計

ネットワンシステムズのビジネス開発本部応用技術部クラウドアプリケーションチームで、渥美淳一氏はゼロトラストとデジタルアイデンティティを軸に、企業の安全なクラウド活用を支えてきた。2005年からロードバランサー(通信負荷を複数のサーバーに分散する装置)や、アプリケーションデリバリーコントローラー(アプリケーション配信を高速化・安定化する装置)を担当。15年以降は認証基盤へ軸足を移し、仮想デスクトップやMicrosoft Azure、Microsoft 365を含む大型案件を統括してきた。

日本企業は長年、社内と社外の境界を固める防御に投資してきた。渥美氏は「ゼロトラストは製品を入れて終わりではない」と指摘する。認証情報が盗まれれば、正規の従業員に見える攻撃者が内部へ

入り込む。侵入を完全に防ぐのではなく、侵入される前提で被害を局所化し、企業活動を止めない設計が欠かせない。

従業員のミスを責めるのではなく、侵入されることを前提に、被害を局所化して企業活動を止めない設計も重視する。認証情報だけに頼らず、端末やアプリ、ネットワークの情報を組み合わせて怪しい動きを捉える。複数の防御を連携させて安全性を高める。

相談の入り口として増えているのが脱VPN(仮想私設網)だ。ただ、VPNを一律に否定するわけではない。用途やリスク、

既存環境を見極め、VPNを安全に使い続けるか、ZTNA(ゼロトラスト

ネットワークアクセス)へ移るかを判断する。重要なのは、社内外を問わず同じ基準でアクセスを確認し、利用者や端末の状態に応じて権限を制御することだ。

渥美氏はセキュリティと利便性の両立を重視する。顔認証や指紋認証、パスキーを使えば、フィッシングサイトでの認証を防ぎながら、利用者の負担を減らせる。不審な動きを検知して強制ログアウトしても、生体認証なら再ログインは容易だ。「従業員に我慢をさせないことが大きい。



渥美淳一

高い専門性を持つ社員を

と認定。

最初に選ばれた七人を紹介。

匠TAKUMIの現場